

崔貞熙の作品にあらわれた二つの戦時体験

—— 太平洋戦争と朝鮮戦争を中心に ——

小 野 順 子*

〔目次〕

- I. はじめに
- II. 太平洋戦争期の崔貞熙
 - 1. 「親日文学」という問題
 - 2. 作品考察
 - 1) 記事・短文について
 - 2) 小説について
- III. 朝鮮戦争期の崔貞熙
 - 1. 女性作家と従軍作家団
 - 2. 作品考察
 - 1) 随筆・その他散文について
 - 2) 小説について
- IV. 崔貞熙と二つの戦争
- V. おわりに

I. はじめに

チェジョンヒ

崔貞熙(1906～1990 年)は、1930 年代に創作活動を開始し、1945 年の「解放」

* 福岡大学人文学部非常勤講師

後も多くの作品を発表した韓国の女性作家である。そして 30 年代に登壇した女性作家の中でも、文壇において多くの関心と持続的な評価を受けてきた作家でもある。

崔貞熙は 1930 年に渡日し、東京の三河幼稚園に保母として赴任している。その時のちに劇作家となる柳致鎮^{ユチジン}らと「学生劇芸術座」に参加しているのだが、そこには彼女の舞踊や音楽などに対する志向が垣間見える¹⁾。1931 年に帰国後、母校の校長先生に勧められるまま「三千里」社に入社して記者生活を始めるとともに、小説を書きはじめた。1934 年には KAPF（朝鮮プロレタリア芸術（家）同盟）第 2 次検挙による、いわゆる「新建設事件」に巻き込まれ、盟員でもなく女性作家としては唯一、約 8 か月の投獄生活を強いられることとなる²⁾。この投獄されていた間に崔貞熙は文学に目覚め、出獄後初めて書いた「凶家」³⁾が本人も認めるところの処女作となる⁴⁾。その後「静寂記」、「山祭」⁵⁾、そして「脈」シリーズと称される「地脈」、「人脈」、「天脈」⁶⁾などを立て続けに発表し、活発な創作活動を始めるのである。

前述したように、崔貞熙は雑誌社に記者として入社後、記者生活をしながら小説を書いているが⁷⁾、さらに 1940 年代に入った太平洋戦争期には、「親日」的な新聞や雑誌に朝鮮語だけではなく、日本語による小説なども含め多数の文章を発表している。また、1950 年に勃発した朝鮮戦争期には従軍作家団に加入して活発な創作活動を行うなど、二つの大きな戦争期において積極的に文学活動をしていることがわかる⁸⁾。

本稿では、崔貞熙の太平洋戦争期と朝鮮戦争期に発表された作品に焦点を当て、彼女の戦時体験がどのように反映されているのか、作品創作以外の文学的な諸活動との影響関係についても留意しながら探っていくことにする。

II. 太平洋戦争期の崔貞熙

1937 年に勃発した日中戦争から 1941 年の太平洋戦争への突入にかけて、植

内地朝鮮の統治における最重要課題は朝鮮の人々を戦時体制に組み込むことにあった。1936年8月に朝鮮総督に赴任した南次郎(1874～1955)は、「内鮮一体」というスローガンを掲げ、朝鮮のすべてを日本の戦争遂行のために動員し、またそれを行うために「皇民化」政策を推し進めていった。1940年には朝鮮人の名前を日本式の名前に変更させる「創氏改名」⁹⁾が実施され、さらに兵力としての動員は志願兵にとどまらず、1943年3月には朝鮮にも徴兵制が公布され同年8月から施行された¹⁰⁾。

文芸面においても「皇民化」政策は例外なく実施され、1939年に創刊された二大文芸雑誌である『文章』と『人文評論』はともに1941年に実質的に強制廃刊となった。『人文評論』を主宰した崔載瑞^{チェジュン}は当局との取引の末、『人文評論』誌を「発展解消」した形で『国民文学』なる雑誌をその年の11月に創刊した。ここでいう「国民」とは言うまでもなく大日本帝国の国民を指している。この雑誌は当初、年に8回は朝鮮語、4回は日本語で刊行することになっていたのだが、朝鮮語による完全版ではないものの小説など一部朝鮮語で刊行された2号分を除いては結局すべて日本語で発行され、日本語雑誌として1945年まで刊行された。

一方、1940年8月には朝鮮語新聞の廃止政策を受け、民族系の二大新聞である『朝鮮日報』と『東亜日報』が強制廃刊の憂き目にあい、主な朝鮮語新聞は、総督府機関紙の『毎日新報』だけになる¹¹⁾。こうした状況下において、1941年から45年の間には朝鮮の作家による朝鮮語創作は減少し、日本語創作は増加していった。そしていわゆる「親日文学」が創作されるようになるのである。

1. 「親日文学」という問題

植民地末期の朝鮮には「内鮮一体」、「皇国臣民化」の実現を目的として結成された、いわゆる「親日」団体が大きなものだけでも200以上存在していた。

その中で文学団体や文学人が関係したものは約 16 団体¹²⁾あった。その中で、1943 年に結成された「朝鮮文人報国会」は、朝鮮にあった既存の 5 団体が「発展的解散をして朝鮮文壇の総合的単一団体」¹³⁾として結成されたもので、初代会長は朝鮮近代文学の父とも言われる李光洙(1892~1950?)^{イグァンス}であった。この朝鮮文人報国会の活動は従軍報告講演会、文学と音楽の夕べ、地方巡回講演、文学者総決起大会、朗読と演劇の夕べ、張り紙など多岐にわたっており、戦争遂行のための文学動員の中心的存在でもあった。

朝鮮人作家による日本語小説が集中的に量産された 1939 年から 1945 年までをみると、朝鮮で発表された作品数は 202 編、作家は 55 名にのぼる¹⁴⁾。特に、1941 年から 1942 年にかけて日本語小説の数は急増するのだが、これには前述したとおり 1940 年からの朝鮮語新聞や雑誌の相次ぐ廃刊と、日本語雑誌『国民文学』の創刊が背景にあることはいままでもない。実は、1930 年代前半から朝鮮人作家による日本語作品は書かれており、その代表的な作家としては張赫宙^{チャンヒョクチュ}(1905~1997)や金史良^{キムサリヤン}(1914~1950)などがあげられる¹⁵⁾。この時期日本語作品を創作した作家には、日本文壇に進出したいというような個人的で自主的な動機が前提としてあり、その意味において、特に 1943 年以降に書かれた日本語作品とは区別して考える必要がある。

ところで「親日文学」という言葉の概念について林鍾国は、「主体的条件を失った盲目的事大主義的日本礼賛追従を内容にする文学」¹⁶⁾と規定している。すなわち、反民族的行為や植民地支配に協力する文学が「親日文学」ということになるが、広くとらえると、内容のいかんに関わらず、この時期に日本語で書かれた文学がすべて含まれることになる。それゆえ、程度の差はあるものの植民地下の文学人たちは客観的には大部分「親日」行為をしたとみなされている。この時期が朝鮮文学史における「暗黒期」とされるゆえんでもある。

朝鮮語による創作が難しい状況の中で、朝鮮の作家たちの対応は大きく 3 つに分けられる。第一に、時局に合わせて日本語であっても創作を続ける道を選ぶとい

う対応であり、当時の多くの作家がこれに属する。第二に、日本語で書くことを拒否し、筆を折るという道を選ぶ対応で、プロレタリア文学の代表的作家である李箕永(1900～?)などがそうである。そして第三に発表のあてもなく細々と朝鮮語で書くという対応で、これには日本でもよく知られるようになった詩人尹東柱(1917～1945)がいる。日本語作品を発表した崔貞熙は、第一の対応をとった「親日作家」ということになる。

「親日文学」を論じるところには様々な難しい問題がある。以前のように、第二、三の対応をとった作家だけが「民族の良心を持つ朝鮮人作家」¹⁷⁾であり、第一の対応をとった多くの朝鮮人作家は「内鮮一体化」、「皇国臣民化」運動の恥知らずな推進者¹⁸⁾と感情的に一刀両断するような論評は韓国文学研究界においても減少してきてはいる。ただ、最近でも『親日人名辞典』¹⁹⁾が刊行されるなど、どの作家が「親日文学」をしたのか、しなかったのかということをはじめ、「親日」というフィルターを通した文学研究が現在でも続いているのも事実である。また、植民地末期に書かれた作品自体が研究対象から除外され、全く論じられないケースも少なくない。「作家が文学道だけに邁進できず、常に政治状況との間で翻弄されるのは朝鮮近代作家の共通の体験であった」²⁰⁾というように、当時の朝鮮の作家たちが抱えていた特殊な問題や置かれていた状況にも留意するという客観的な視点に立った作品研究の必要性を感じるのである。

以上のような「親日文学」の諸問題を踏まえつつ、崔貞熙が太平洋戦争期に発表した作品のなかで、『毎日新報』や『京城日報』などの新聞や「新日」的な雑誌に発表された作品について、特に時局を反映した内容のものを中心に検討していくことにする。

2. 作品考察

1) 記事・短文について

崔貞熙は植民地末期である1940年代に入ると、『毎日新報』やその姉妹紙で

ある日本語新聞『京城日報』²¹⁾などの総督府の御用新聞や、「親日」的な雑誌に小説以外にも多数の文章を発表しはじめるようになる。新聞や雑誌に発表された記事や短文は以下のとおりである。

◇『毎日新報』の記事（原文はすべて朝鮮語）

- ①「西窓」1940.1.4
- ②「新生活の樹立と旧習打破」(新生活의 樹立과 旧習打破) 1940.8.8
- ③「女性指導部隊」1940.8.13
- ④「(女性訓)美しく」(아름다우게) 1941.4.20
- ⑤「時局と銷夏法」(時局과 銷夏法) 1941.7.15
- ⑥「鳥を放して①、②」(새를 날려보내고) 1941.8.3~5
- ⑦「私欲を清算して正しい戦時家庭生活」(사욕을 청산하고 참된 전시 가정 생활) 1941.12.12
- ⑧「円形」1942.1.3
- ⑨「東亜の新しい朝」(동아의 새 아침) 1942.2.21
- ⑩「私の家庭の科学化」(내 家庭의 科学化) 1942.3.12

◇『京城日報』の記事（原文はすべて日本語）

- ①「(明滅燈)赤木蘭子礼讃」1940.9.3
- ②「二つのお話」1941.1.5
- ③「映画館と子供」1941.6.15
- ④「もっと知識を豊に」1941.6.24
- ⑤「病める間に」1941.8.26
- ⑥「初秋の手紙(1)~(3)」1941.9.23、25、26
- ⑦「御国の子の母に」1942.5.19
- ⑧「晴れた青空」1942.12.12

◇短文（㊦印の原文は朝鮮語）

- ①「母のころ 一子供をもって見ればー」『国民新報』1939. 5.14
- ②「親愛なる内地の作家へ」『モダン日本』11-9、1940.8
- ③「林芙美子と私」『三千里』13-12、1941.12
- ④「徳寿宮の朝」『国民文学』2-1、1942.2
- ⑤「子をつれて」『国民文学』2-5、1942.2
- ⑥㊦「夢は南域へ」（꿈은 南域으로）『大東亜』、1942.5
- ⑦「花」『文化朝鮮』4-3、1942.5
- ⑧㊦「<ショパン>を弾く印象」（<쇼팽> 치든 印象）『大東亜』、1942.7
- ⑨「作家島木健作」『大東亜』、1942.5
- ⑩「軍国母性讃」『半島の光』7月号、1944.7

◇その他講演会、座談会

- ①「君国の母」（君국의 어머니）『大東亜』、1942.5²²⁾
- ②「帰還勇士と文人座談会」『緑旗』1942. 1

日米開戦を受けて書かれた「私欲を清算して正しい戦時家庭生活」では、兵士と同じ気持ちで緊張感を持たなければならないということ、自分だけよい生活をしようという考えは捨てて、「大和魂」をもって一緒に闘っていかうということが訴えられている。また、日本にはその「大和魂」があるから負けないのだと力強く息子に言われたという記述があるが、これは開戦後2年が経って書かれた「晴れた青空」でも回想するかたちで繰り返し引用されている。

さらに、1942年の朝鮮における徴兵制閣議決定を受けて書かれた「御国の子の母に」では「これからの私は子供に『僕、戦争に征って死んでもお母さん泣きませんか』と聞かれる時、まごつかずに答へることと思ひます。」と語っており、「君国の母」、「帰還勇士と文人座談会」においても同様のエピソード

が紹介されている。さらに座談会では「日本のためにつくして死ぬんだから、よろこんで死にます」という息子を何も言わずにただ抱きしめてやったということも語られている。

同じく徴兵制度の決定をうけて『国民文学』では「名士・徴兵の感激を語る」という特集が組まれたが、そこに崔貞熙は「子をつれて」という文章を書いている。ここでは「小共を、もつと大事にしなければならない。いい意味でもつときびしく育ててゆくべきだ、と思ひました。父のない児は、どうしても甘やかされ勝ちですからね。この児が大きくなって、他人に負けるやうな軍人になったらどうしやうかと、まるで、田舎のをばさんみたいに気が気ぢやありませんわ²³⁾」という「信念」が述べられている。

このような子育てにおける見本とすべき日本の母親は「軍国母性讃」において紹介されている。例えば樺太の小さな村に住み、女手一つで2人の息子を立派に育て上げた「ミズモト・ハマ」という女性についての記述がある。長男は徴兵検査に合格し、次男は海軍志願兵になり母のもとから去ってしまったあとでもハマ女史はよりいっそう仕事に励み、軍隊からの補助金も拒否して立派に暮しているという逸話が紹介されている。

以上のような記事や短文に見られる内容が皆、崔貞熙母子の間で実際にあったやりとりであるかは別にして、ともかくもこれら母子間の話題が次の時代を背負う子どもたちの重要性和、彼らを育てる大人の責任の追及と、そしてひいては朝鮮半島における円滑な徴兵制の実施ということを背景にしていることは言うまでもない。

この他にも「東亜の新しい朝」では、シンガポール陥落をうけ「東アジアにおけるイギリスの勢力が断ち切られ、私たちの前には新しい東亜の朝がくるようだ」という内容が述べられている。「円形」は、スタンドをつけた時にできた紙の上の円形に1年計画を書くというもので、一見、時局とは関係ないもののように見えるが、そこにも「空を見上げるときは必ず、あの空をどうすれば

守れるかに頭を使う」という「生活の徳目」が書き込まれているのである。

また、「初秋の手紙 一(第一信)債権を売る日一」では臨戦報国団の一員として豆債権を売りに出た決意が述べられている。戦争を人ごとのように思っていた自分は情熱が不足、情熱のないものには信念がないのだとして、「今日私が債権売りに出るまで、自分自身を勇気づけ深く心を決めましたのは、即ち戦場へ行つてゐる兵隊のやうな信念を持ちたかつたからなのです。情熱を持ちたかつたからなのです。力を持ちたかつたからなのです。」と述べている。債権を売ることによって今までの迷妄から自分を救い出し、未来への希望を持ちたいのだと、その目的を語っている。

「二つのお話」では先輩に婦人会の主宰者になってほしいと言われて断わったとき、情熱がない人だと言われて寂しかったということが述べられている。そして自分は仕事に対して人一倍情熱を持っており、それは静かで心の奥底にあるもので、その場限りのような情熱でもって軽々しく行動する人を軽蔑するともいっている。あとに書かれた「初秋の手紙」では自分は情熱が足りなかったと反省しており、この「二つのお話」の内容とはずれを感じるが、時局的なものを書こうという目的意識が先行した故の矛盾であると推測される。

以上のように、太平洋戦争期に書かれた記事や短文の多くが時局に即した内容のものであるということが分かる。その中でも特に、崔貞熙と息子との関わりを軸に、戦時にあつての理想的な子どもや青年の姿と、そこに多大な影響力を発揮する母親の重要性が強調されているという特徴がある。ここには、半島における「内鮮一体」の浸潤と徴兵制度の円滑な進行を企図する日本の植民地政策と戦争遂行に呼応する、崔貞熙の作家的な姿勢というものも確認できるのである。

2) 小説について

太平洋戦争期に新聞や雑誌に発表された小説は以下のとおりである。

◇朝鮮語小説

- ①「黎明」『野談』1942. 5
- ②「薔薇の家」(薔薇의 집) (放送小説)『大東亜』、1942.7

◇日本語小説

- ①「幻の兵士」『国民総力』3-2、1941.2
- ②「野菊抄」『国民文学』2-9、1942.2
- ③「二月十五日の夜」『新時代』2-4、1942. 4
- ④「静寂記」『文化朝鮮』3-3、1942.5²⁴⁾

「黎明」は昭和16年(1941年)の大みそかから翌日の元旦にかけてのソウルが舞台となっており、女学校時代、非常に仲の良かった「ウニョン」と「ヘボン」が10数年ぶりに偶然再会するものの、時局への対応の微妙なずれが浮き彫りとなる。ヘボンは西洋人の校長や英語の教師への懐かしさや受けてきた教育環境の影響によって、強い敵愾心を持たず自分の進むべき道を模索し葛藤しているのであった。そんなヘボンの姿に、同じように女学校時代を楽しく懐かしく思うウニョンであったが、今は私的なことを考える時ではなく、全体を考えなければならない時であり、大義のために小義を捨てなければならないとヘボンを諭すのである。それでも先生から得た愛や恩を忘れてはならないと訴えるヘボンに対し、ウニョンは次のように言う。

何が恩で何が愛よ、ヘボン。それが愛で恩だと思っただけよ。それが彼らの魔術というものなのよ。左手には十字架、右手には刃物を持って、聖書と阿片をひと抱えにして私たちが住む、東洋人が住むところをくまなく回って、だまして蹂躪して強奪しているのに、私たちは彼らが弄する妖術、魔術にかかってそれがわからないのよ。(中略) 私たちが彼らの妖術から魔術か

ら抜け出して彼らの正体をありのままに見ることができる今日にいたってもそんなことを言っていたら、東洋人である資格をなくす人間よ。(中略)ヘボンも何も考えずに立ち上がらなきゃ。アジア 10 億の種族がみんな立ち上がっているのに、ヘボンひとりがそんなことでどうするの²⁵⁾

演説に近い語調でこう語ったウニョンであったが、ここには「内鮮一体」、「大東亜共栄圏」というスローガンを礎に、太平洋戦争が大きく東洋と西洋の戦いであるということが強調されている。ただヘボンはこのウニョンの熱い言葉とは裏腹に、煮え切らない返事をするなど、ふたりの間の違和感は簡単にはぬぐい去れない印象を受ける。

しかしこの違和感を越えてふたりの間に共通して存在するものがある。それは恐らくこの小説の主題ともいえるのだろうが、子どもに対する愛情、母性である。純粋な敵愾心と愛国心によって、時に母親の言動にも抗議する子どもらにとまどいながらも、頼もしく愛おしく感じる彼女たちは、子どもらと歩調を合わせて進んでこそ、厳しい現実を乗り越えられるという共通した認識をもっている。「子どもたちの為に彼らの幸せを目標にして進んでいだけ、そのことがすなわち私たちの幸せ」²⁶⁾なのだというウニョンの言葉にヘボンも素直に共感するのである。

翌日、ヘボンともう一人の同窓生「キョンジャ」が子どもを連れてウニョンの家を訪れ、子どもたちと一緒に「銃後少国民かるた」に興じるのであるが、「日本の海軍世界一」、「神に祈る武運長久」というようなかるたの文句がキョンジャによって読み上げられていくところに、この作品の時局的な面が色濃く反映されている。

「薔薇の家」では太平洋戦争によって覚醒した婦人「ソンネ」とその夫「ヨンセ」の葛藤を軸に物語が展開していく。太平洋戦争が起こった後、女中に暇を出したソンネは家事に追われる毎日だった。ヨンセは、そんな妻の姿に女中

を解雇してしまったことを後悔するのだが、ソンネは「日ごとに家事が楽しくなっていて仕方ないわ」²⁷⁾と答えるのである。ヨンセは「それは奴隷根性があるからだ」²⁸⁾と彼女をばかにするのだが、ソンネは少しも不満を見せなかった。

ある日、それまで女中に出席させていた愛国班に参加したソンネは人任せにしていた自分の過ちを悟り、次第に班の会合で積極的に意見を言うようになった。そしてついに愛国班長になってくれと要請までされるようになり、ソンネ自身もやりがいと責任感を感じているのだったが、ヨンセはそれを不快に感じていた。その後、ヨンセの友人である「ナムシク」が訪ねてきて、ソンネに「有閑マダム」タイプの彼の妻を感化してくれと頼むのであった。

このように、この小説は啓蒙的な色彩の濃い作品だが、「日帝末期にはこのような教訓的な小説が歓迎され、放送小説として売っていたようだ」²⁹⁾という指摘がある。この作品の末尾には「放送小説」という記載もあり、時局に呼応する視点から創作されていることがわかる。時局に取り残された女性たちを、女性自身が啓発していくのだということを強調している点が印象的である。

また、この作品は日本語で書かれた、小説というよりも小品に近い「二月十五日の夜」の内容を追加し、朝鮮語で書きなおしたものである。妻「仙柱」が愛国班長になったことに、女は家庭を守るものだと不満を露わにする夫「南駿」との夫婦の葛藤のなかで、銃後の国民が国のためにできること、なすべきことが愛国班員の意識改革の重要性を通して訴えられている。また、美の標準がいつも固定的ではないように、女の美しさも変化するものだとして、積極的に競争と関わっていく女性の姿に新たな価値を与えようという意図も感じられる。結局、夫婦の葛藤はシンガポールの陥落を告げるラジオによって収束し、夫は妻が愛国班長になることを許すという内容である。

以上のように「薔薇の家」、「二月十五日の夜」ではともに愛国班精神と活動の重要性が説かれている。これは「云ふまでもなく愛国班は新しい国民運動の単位であって、(中略)この愛国班生活を題材にして、愛国班精神を美化するが

如き文学は国民文学の最も重要な一項目として追求されるべきである。』³⁰⁾という崔載瑞の言葉にもみえるように、この時期作家らに求められた創作課題の一つとしての重要性がうかがい知れる。

「幻の兵士」の主人公「ヨンスン」（女性）は偶然「山本二等兵」に会っていろいろな話をするうちに親しくなり、兵士小屋まで遊びに行くことになった。そこには山本二等兵以外に4名の兵士たちがいて、皆ヨンスンと親しくなったが、4人は洛東江沿江鉄道警備に派遣され、山本二等兵だけは「北支」の戦地に行くことになった。特に山本二等兵に特別な親しみを抱いていたヨンスンは寂しかったが、戦地の山本二等兵から手紙が届くとすぐに返事を書き、2人の交流は続かかと思われた。しかし結局、山本二等兵が戦死してしまったという知らせを聞きヨンスンは咽び泣くのであった。

この小説で興味深いことは日本の兵士たちが皆、朝鮮の文化に対して関心を持っており、積極的に知ろうとする姿が描かれている点である。彼らはヨンスンに「アリラン」と「ハンゲル」を教えてくれというのである。そしてヨンスンが書いたハンゲルを見て、「面白いですね、これらの字の形は朝鮮の家屋の構造によく似てゐるではありませんか？」³¹⁾と言って、出征するときまでハンゲルを全部覚えるとまでいうのである。

このような兵士たちの姿の描写は、崔貞熙の祖国に対する愛国心の表出と捉えられなくもないのだが、次のような山本二等兵の手紙の内容を見るとその目的が違うところにあるということが分かる。

諺文の形をしてゐる朝鮮の家屋の構造と支那家屋の構造がよく似てゐるのを思ひ、支那と朝鮮と日本とは神代からの或るつながりがあったのだと信ぜずにはゐられません。即ち神代からの宿命的なつながりだけはどうすることも出来ないものだと思います。どうか、貴女も僕と同じ理念をお持ち下さい。そして神のみ志である東洋平和のために強い女性におなり下さい。³²⁾

結局この手紙で強調されているのは「内鮮一体」の思想である。ただ、この「内鮮一体」思想の高揚を目的とした結果だったにせよ、この作品を通して朝鮮文化に目を向けさせているという点が特徴的だといえる。実はこのような内容は短文「親愛なる内地の作家へ」でも確認できる。菊池寛や久米正雄らが傷病兵慰問講演行脚のついでに朝鮮にも寄るということを新聞で知ったという崔貞熙は、彼らに次のように訴えている。

いらつして朝鮮をよく視察して欲しい。朝鮮の文化を、眞の意味からそのそこまで知りつくして欲しいのです。知らないところにどうして理解が生まれませう、理解のないところにどうして親愛が望まれませう。今まで貴方方が持つていらした、態度を捨てていたゞきたいのです。³³⁾

「内鮮一体」の前提としてあるべき日本と朝鮮の対等な相互理解の必要性を訴えるこの言葉にこそ、崔貞熙の本意があらわれているのではないだろうか。また、この文章が「幻の兵士」より先に書かれたものであることから、恐らくこの短文を基に小説として内容を膨らませたものではないかと考えられる。ここには記者として出発した崔貞熙が、記事や短文を基に小説を書くという、その創作スタイルが確認されるのである。³⁴⁾

「野菊抄」は自分を捨てた男性にあてた手紙という形をとった告白体の短編である。語り手である「わたし」には男との間に11歳になる息子「勝一」がおり、この息子のために志願兵訓練所に行くという内容である。この小説は崔貞熙自身が志願兵訓練所を訪問した経験をもとに創作されており³⁵⁾、訓練所内部の状況が詳しく描かれている。「わたし」は息子を連れて訓練所を訪れた理由を次のように説明する。

軍人と縁の遠いわたし達は軍人生活がわからないし、軍人生活のわからない

ために軍人精神も知らなかったのです。立派な帝国軍人を作ろうとしてゐるわたしです。立派な軍人になろうとしてゐる勝一です。どうしても、軍人生活—軍人精神を教へ込まなくてはなりません。軍人に軍人精神が抜けてゐることは、魂のない人間と同様だからです。わたし、どんなことをしても、勝一を魂のない人間、軍人精神の抜けてゐる軍人には作らないつもりでゐます。³⁶⁾

この言葉に呼応するように「原田教官」は彼女に次のように言うのである。

吾々が五年間この志願兵訓練にたづさわってゐるそのうち一番強く感じたのは半島の母親が早く覚醒しなければならぬと云ふことです。(中略) どうも、無知な母親と云ふのは、眼の前の盲目的愛情だけで、大きい、輝かしい未来などは少しも見抜けんので(中略) 結局、かう云ふ風な母親達は、自分の子供を自分の手で殺すのです。(中略) 母の感化と云ふものは、偉大なものだと思つてゐるんです。でありますから、僕の見るところから申しますと半島の青年が、立派な軍人になれるのには、先づ何よりも母の力だと思つてゐます。³⁷⁾

『野菊抄』はむしろ不自然な小説的脚色を省略して、例えば「志願兵訓練所入所案内状」というような題目で発表されていれば、ずっと簡明に読まれるところの小説だった³⁸⁾という批評があるように、この小説は自分を捨てた男にという形をとりながら、むしろ半島の母たちに送る説教という印象が強い。1938年2月に朝鮮に志願兵制が公布されたのをうけて、愛国班同様、この志願兵制度の問題が文学の重要課題となっており、それに呼応して創作された作品だといえる。

そしてここで注目される点は、勝一が母に「おかあさん！僕、戦争へ征つて死んでもおかあさんもう泣かないね」³⁹⁾という表現である。子どもが母を励ま

す、このような言葉は前述した通り、小説以外の作品でも幾度か用いられており、崔貞熙の「親日」的な作品にあっての象徴的な表現だと見ることができる。

崔貞熙が自身の多くの作品において母子の姿を通して表現しようとしていたのは、やはり彼女の「母性観」の問題に起因するものと考えられる。崔貞熙の文学世界は「女性特有の内面意識の表出」だが、特に母親の内面意識に対する持続的な探究は、崔貞熙文学の大きな特徴だといえる。

崔貞熙の「母性観」の形成に影響を与えた要因の一つとして考えられるのが、エレン・ケイの「母性論」である。エレン・ケイは男女間の顕著な差を信じ、男女が各々違う機能と職分を尊重することを望み、特に女性に関しては「母」としての意味を主張した。⁴⁰そして女性の固有性、すなわち母性を強調することで性差別を除去しようとした。エレン・ケイは人類の発展のためにその可能性を担う新しい世代を生み育てる母性としての役割を高く評価したのである。

朝鮮でエレン・ケイの思想が持続的に紹介され、論議されていた理由はまさにこの「母性論」のためだったと考えられる。社会主義女性解放論のようないくつもの女性解放論の紹介とそれに付随する女性解放運動によって自由恋愛信奉者も増えたが、その結果生じた新しい問題がまさに私生児問題であった。女性解放の象徴とも言うべき自由恋愛が結果的に女性に深刻な問題をもたらしたという悲劇である。それでエレン・ケイが主張する母性擁護は、私生児問題に直面した朝鮮の母親たちにとっては救いの象徴だったと言えるのかもしれない。自身も私生児と変わらない幼少期を過ごし、また私生児をもった崔貞熙にもエレン・ケイの「母性論」の影響が少なからずあったと推測される。⁴¹

ところで、「母性」というのは戦時期にあって重要な意味を持つものである。日本は戦争遂行にあって後方を守るための強固な国家観念と合理的な家庭能力を具備した、いわゆる「良妻賢母」を作りだすことに力を注いでいた。すなわち、「国家政策を家庭という私的なレベルで貫徹して実現」⁴²しようというのである。母性を強調しながらこのような国家的、国策的母性像が作られ⁴³、

女性たちの中で特に知識人や運動家たちがその「良妻賢母」の実態をよく理解できないまま、母性主義を称賛する家族国家イデオロギーを受け持つ人間となり、結局戦争協力をするようになるのである⁴⁴⁾。母性を重要視し、それを強調する崔貞熙だからこそ、そのような戦時期の国策としての母性強調に対して、躊躇なく加担する結果を招いてしまったと推測される。

また、崔貞熙の戦争認識を考えると参考になるのは、「親日」的な団体への参加など、その活動内容である。崔貞熙は植民地末期に「朝鮮文人協会」、「朝鮮臨戦報国団」の行事で作品朗読や幹事会、座談会に参席しているが、その時恋愛関係にあった金東煥と常に一緒に参席していた。⁴⁵⁾ 金東煥が主宰していた『三千里』と、それを改称した『大東亜』に多くの文章を書いてもいるが、このような態度は崔貞熙の「親日」的な活動や戦争参与への鼓舞などにあって、それが主体的な行動ではなかったという印象を与えるものである。崔貞熙は自身の作品に不幸な人妻や未亡人が多く登場する点について次のように述べているが、ここに彼女なりの生きていく上での人生観というようなものが見て取れる。

運命的な女性たちがたくさん出てくるでしょう。いつでも孤独で悲しく弱い、そんな女性たち・・・ だからといって世の中でよくいうしっかりした人間ではない。ただの一度も参政権を叫んだことはなく、男女同等を掲げることもない。しかし世の中のどの女性よりも愛が何で、美しいものが何かをよく知っている聡明な女性たち。生まれ持った運勢を運命として受け入れる・・・ とにかく私自身運命的な女ではないかと思います。⁴⁶⁾

このような崔貞熙の言葉には弱い女性を肯定しようという思いを見ることができる。女性がひとり生きていくのは難しかった時代に、好意を寄せる男性の考え方や思想に従って生きていくというそんな方法も彼女は否定しないようで

ある。崔貞熙は生まれ持った運勢に逆らって生きるのではなく、どんなことでも運命として受け入れて生きることを認め、自分自身もそのように生きようとしたのである。そのために崔貞熙は戦争も運命と受け入れて、戦争という難しい時代に逆らわず生きていこうとした結果が、植民地末期には「親日」的な行為として表れたと考えられるのである。

Ⅲ. 朝鮮戦争期の崔貞熙

1950年6月25日に勃発し、以後3年にわたって朝鮮半島を舞台に繰り広げられた朝鮮戦争は、1945年の「解放」以後、朝鮮半島に起こった事件の中でも最大のものである。この戦争は戦線が往来したため民衆が被った被害は大きく、南北朝鮮にもたらした物的・人的被害は甚大であった。⁴⁷⁾特に、同族相殺であった戦争の悲劇は、離散家族⁴⁸⁾や戦争孤児の問題などを生み出し、その傷跡は休戦から60年経った現在においても深く残っている。

1945年8月15日の「解放」以後、左右翼両陣営はそれぞれに目指す「民族文学」の確立とそれによる「統一文学」の樹立に向けてさまざまな文学団体を設立した。⁴⁹⁾しかしながらこうした活動が実を結ぶことなく、両者の溝はますます深まっていきながら、朝鮮戦争を迎えることになるのである。

戦争の勃発に伴い、韓国文壇もすぐさま戦時体制に入ってしまったのであるが、作家たちには愛国心及び、戦意を鼓吹する任務や戦況を銃後の国民に知らせる任務などが要求された。従軍作家団はまさにこのような要求に応えるべく結成され、そこには陸・海・空軍を合わせて約60名⁵⁰⁾の作家が所属していた。一方、北朝鮮の側も戦争開始とともに小説家、詩人たちは戦時体制へのすばやい対応をみせ、戦争勃発の翌日である6月26日には、早々と20名の作家たちが前線に向けて出発している。⁵¹⁾

ところで、韓国の各軍従軍作家団の組織と活動内容について、この従軍作家団の活動はこれと類似した側面を、日本による植民地支配末期の皇軍慰問作家

団に見出すことができるという指摘がある。⁵²⁾ 1937年7月に日中戦争が勃発すると、日本では従軍体験をもとにして書かれた作品が発表され始めたが、朝鮮では1939年、総督府通訳官である西村眞太郎によって火野葦平の『麦と兵隊』（1938年）が翻訳、紹介された。そのような状況の中で朝鮮文壇も従軍文筆部隊を派遣しなければという論議が起こり⁵³⁾、同年皇軍慰問作家団が結成されている。1939年4月、中国各地を訪問した皇軍慰問作家団員たちは結成当初の目的を達成するため、帰国後作品を発表したが⁵⁴⁾、それらの従軍活動とその作品化という点では、確かに朝鮮戦争期従軍作家団と類似点があると見ることもできる。

ただ全体的な活動内容の類似という点からみると、皇軍慰問従軍作家団よりもむしろ太平洋戦争期に結成された朝鮮文人報国会の活動の方が重要である。戦争が日中戦争から太平洋戦争へと拡大されるに従って、軍部によるジャーナリズムなどに対する圧力や要求が多くなっていったが、朝鮮文人報国会の活動もそのような時局に呼応する形で多様に展開された。その中で例を挙げるならば、従軍報告講演会、文学と音楽の夕べ、地方巡回講演、文学者総決起大会、朗読と演劇の夕べ、張り紙などの活動が行われているが、これらは朝鮮戦争期の従軍作家団の活動内容とも共通するものである。朝鮮戦争期従軍作家団の活動は、おそらく太平洋戦争期に朝鮮文壇の中心的存在であった朝鮮文人報国会の活動を参考に行っている部分が多いのではないか、という推測が可能である。⁵⁵⁾

1. 女性作家と従軍作家団

韓国において戦時文壇の中心的存在であった陸・海・空、各従軍作家団⁵⁶⁾に崔貞熙を含め5名の女性作家が含まれていた事実はほとんど知られていない。⁵⁷⁾ 従軍作家団に加入し活動した多くの作家には、中堅クラスの有力文人が多く含まれているが、女性従軍作家のうち、崔貞熙、孫素熙、張徳祚の3名の作家も韓国近現代文学史においてよく知られた作家でありながら、従軍作家として活

動した事実はもとより、戦争期の作品のほとんどが考察されていないのが現状である。

女性作家たちが「なぜ従軍作家団に加入して創作活動をしたのか？」という疑問について考える時、次のような崔貞熙の回想文は十分に参考となりうるだろう。

蒼空俱樂部ではユニフォームや靴だけでなく、米、粗織りの木綿も配給を受けた。一かますずつもらうと私の境遇では余って、回って行っては貧しい避難民たちに分けてやりもした。(中略) ソウルに行って来なければならないことがあったが、軍服を着ていなくては汽車に乗れず、渡江はさらに難しかった時だ。(中略) 避難地大邱や釜山でその困難なヤマを越えて永登浦に下車する人々を目撃しては軍服の力が大したものだと悟った。⁵⁸⁾

この回想文は従軍作家団員であってこそ得られる恩恵が少なくなかった当時の状況をよく見せてくれている。大邱や釜山の方に避難した作家たちは、他人の「寝食を心配してくれるほど余裕がある人は一人もおらず」⁵⁹⁾「一種の乞食」⁶⁰⁾であったという。戦時体制下の極限状況の中で生きていくということは、特に女性には耐え忍びがたく難しいことであり、そのような意味で従軍作家団の存在は女性作家たちに大きな助けとなった。そのうえ、作家団ごとに機関誌を発行しておりそこに作品を発表することもでき、作家活動を続けるためには従軍作家団に加入することが最善の選択であったと推測される。

ところで、女性従軍作家団員中、崔貞熙、張徳祚、孫素熙の三人は人民軍統治下のソウルで1950年6月28日から9月28日までの約3ヶ月間、〈朝鮮文学家同盟〉⁶¹⁾ (以下、「文盟」と略す)に加入して活動した前歴が問題視されていた。⁶²⁾ 人民軍がソウルを占領した時、ソウルから逃げ出せなかった数多くの残留文人たちのこのような行為が反逆行為と見なされて、彼らに対する司法処

理問題が論議されていたのである。軍検警合同捜査本部から〈反逆作家〉名簿を作成してくれという要求を受けた〈文総救国隊〉⁶³⁾は文人たちで特別委員会を構成して審査に入った。A級は銃殺、B級は長期刑、C級は短期刑、D級は訓放、E級は無罪という五段階の処罰方針が決定されたが、大部分の文人たちはD級とE級に分類され処罰を免れた。⁶⁴⁾

そのような状況の中で上記の作家3名は『赤下三朔九人集』に共産主義に対する憎悪心と敵愾心などを吐露した文章を発表している。崔貞熙については後述するが、張徳祚は「恐怖と戦慄と欺瞞と殺傷に満ちた生き地獄がまさに共産主義の世界であるのだ」⁶⁵⁾という表現で共産主義を批判している。「誰もが言うようにすでに中間派もなく灰色分子もありえない」⁶⁶⁾という言い分はイデオロギー的対立が両極化された当時の社会及び文壇の状況をよく説明してくれている。また孫素熙の場合は短篇小説の形式で、保身のため仕方なく美術同盟に加入した2人の女性の葛藤を描いている。この2人の女性の姿を通して人民軍統治下の文盟で活動する他なかった孫素熙自身の困難な立場を訴えようとしたのではないと思われる。

このように彼女たちは「反逆文人」という汚名をそそぐことに努めていた。従軍作家団に加入していたこともこのような目的に基因するところが大きいと考えられる。以上のような点を勘案すると、女性従軍作家たちが従軍作家団に加入するようになった主な動機は、戦争の美化や戦意鼓吹のためであったというよりは生活保全、創作活動のための紙面確保、自己保身であったとみることができる。

2. 作品考察

1) 随筆・その他散文について

朝鮮戦争期に発表された崔貞熙の随筆や、その他の散文は以下のとおりである。

- ① 「乱中日記から」(乱中日記 에서) 『赤下三朔九人集』, 国際報道連盟, 1951
- ② 「愛憎交錯記」 『詩文学』, 1951.6
- ③ 『愛の履歴』(사랑의 履歴), 啓蒙社, 1952
- ④ 「ライラック」(라일락) 『学園』 2 - 4, 1953. 4

前述したように、崔貞熙は「文盟」での活動が問題視されていた中で、『赤下三朔九人集』に「乱中日記から」と題して、ソウルが人民軍統治下となる前日の6月27日から10月21日までの出来事を記した日記体の文章を寄せている。⁶⁷⁾ この中で、「人民の血を吸い取る文学をした」という理由で夫、金東煥とともに洞人民委員会に捕まったということ、その後、自己保身のために仕方なく「文盟」に加入したのだと弁明している。そして「文盟」の盟員たちの「情のないまじりが銃弾より恐ろしいことを初めて知り」、「共産主義が人間性を失わせる主義だということ」⁶⁸⁾を知ったと述懐している。

また日記の後半部分では、ソウル収復後、大邱で軍に入隊したということだけ聞いてからは全く消息の分らなかった息子が母を案じて戻って来て再会を果たしたことが記されている。立派な軍人になった息子の姿に「実際私はこの時まで一彼に会わなかったこの時まで一 民族は愛しても国家は愛せなかったようだ。今私は益祚^{イクチョ}とともに益祚が血を流して支える国家のために、私も支えることを誓う」⁶⁹⁾という言葉で愛国心を強調している。

『赤下三朔九人集』が発行された目的は「確固不動たる打共信念と必勝の愛国闘志でもって一路勝利と統一の祖国戦線に献身邁進すること」にある。⁷⁰⁾と、同時に「文盟」で活動した作家らが文章を書いていることを勘案すれば、本書は作家らの「反逆文人」という汚名をそそぐ「弁明の場」としての性格も併せもっていたと考えられる。当然、内容は時局的なものとなり、崔貞熙の文章でもその目的意識がはっきりと見て取れる。ただ、ここで注目されることは、立派な軍人となった息子「益祚」の登場によって、母である自分が改心するとい

う構図である。これは太平洋戦争期に書かれた記事や短文、小説でもよく見られた手法であり、二つの戦時時期における崔貞熙の作品創作の連続性を確認できるものである。

「愛憎交錯記」は大邱での避難民生活について書かれている。作家に限らずソウルから逃げ出した多くの人々は釜山や大邱など地方での避難民生活を強いられることとなった。そこに親戚でもいるならまだしも、全く身寄りのない場合には部屋を間借りすることもままならず、やっと借りることができても、今度は家の主人との間で問題が起きることも多かつたようである。女性従軍作家たちの多くがこの避難地での生活をもとに、避難民生活を題材にした作品を書いているが、尹金淑が「水」⁷¹⁾ という作品で、地元の人々と避難民との間で繰り広げられる水の確保のための争いの様子を通して、避難地での生活を「武器のない戦争」⁷²⁾ と表現したように、女性たちにとっては避難地での苦労と地元の人々との葛藤や対立こそが戦争よりも逼迫した問題としてあったということがよく分かる。

この「愛憎交錯記」でも大邱で4軒目に間借りした家での出来事が中心に書かれているのだが、トイレを汚すな、といわれぬ叱責を受けた崔貞熙は、言葉にならないほどの侮辱で、非常に不快で傷ついたらと繰り返し書いている。この家から早く移りたいと友人に言うと、「避難民がそれくらいのことで気分が悪いなんて言うものではなく、その貴族的な気分は捨てろ」と逆に叱られてしまうのである。このように、住む家があるだけ幸せだとわかっていながら、自尊心を傷つけられ苦悩する知識人作家らの姿は、朝鮮戦争期の他の作家の作品にもよく見られる。

『愛の履歴』は崔貞熙の随筆集である。避難するまでの「16, 7年間の私の足跡のようなもの」⁷³⁾ だというこの随筆集には、テーマごとに総計60篇もの作品が収録されている。「戦塵の中で」と題した項目の中には8篇があり、前述した「乱中日記から」で見られたような、洞人民委員会に捕まった日のことを

回想した内容のものや、避難民生活について書かれたものなどがある。「私と軍人」と題した文章では、息子益祚に関する記述もみられる。

太平洋戦争期に書かれた「親日」的な内容の作品はやはり見られないが、前述した「空を見上げるときは必ず、あの空をどうすれば守れるかに頭を使う」と書かれていた「円形」が収録されている。興味深いことは、この部分の記述が『愛の履歴』所収のものでは変わっていることである。「放浪したくなるといつも空を見上げて生きてきたが、これからはそうしないことにする。空を見上げると食欲がなくなってしばらくめまいがするので—」（下線は筆者）⁷⁴）というように、下線部分が書きかえられているのである。部分的ではあるが、やはり時局的な初出のものをそのまま載せることには抵抗があったためであろう。だとすると、その他の収録作品についても、特に植民地末期に書かれたものについては修正して再収録された可能性が高いと考えられる。

2) 小説について

朝鮮戦争期に発表された小説は以下のとおりである。

- ① 「風の中で」(바람속에서) 『新天地』7巻2号(通巻50号), 1952.3
- ② 「空が向かい合う道」(하늘이 맞서는 길) 『国民文庫(一) 傑作小説十人集』、青丘出版社、1952. 8
- ③ 「林下士とその母」(林下士와 그 어머니) 『協同』37号, 1952.12
- ④ 「落ち葉散る日」(낙엽지는 날) 『学園』2巻1号, 1953.1
- ⑤ 「落花」 『文芸』4巻1号(通巻15号), 1953.2
- ⑥ 「墜落した飛行機」(墜落된 飛行機) 『文芸』18号, 1953.6
- ⑦ 「緑色の門」(綠色의 門) 『서울신문』(ソウル新聞) 1953.2.25~7.8
- ⑧ 「出動前夜」 『戦時韓国文学選』、国防部政訓部, 1954

朝鮮戦争期にあって従軍作家たちに期待されていたのは、戦争鼓舞と戦意鼓舞を目的とした作品創作であった。崔貞熙の小説の中でそうした期待に応えるような時局的なものとしては、「空が向かい合う道」と「林下士とその母」、そして「出動前夜」が挙げられる。この3作品はすべて「出征する息子を引きとめようとして息子に諭される母」という共通したテーマを持っており、ここでも太平洋戦争期の作品との連続性が確認できる。特に、「空が向かい合う道」と「出動前夜」は登場人物や構成が全く同じで、題名こそ違うものの同一作品とみても問題ないようである。「空が向かい合う道」は作品の最後に創作された日付が「1951、2、20」と記載されているが、「出動前夜」ではそれがいないため、どちらが先に書かれたものであるかは分らない。ただ、「空が向かい合う道」の方が量的に多く、「出動前夜」を加筆したようなかたちとなっている。

声楽家としてソウルで人気を博していたこともある「成珍麗^{ソンジルリョ}」は朝鮮戦争の勃発によって夫が拉致され行方不明になってしまった。そのうえ、一人息子である「スンス」にも第二国民兵の召集令状が届く。何とか息子を引きとめようとする母をスンスは強い語調で諭すのだが、それでも母珍麗はうろたえるばかりである。

スンスが訓練所に入ってしまうと、珍麗は毎日のように差し入れを持って面会に出かけて行った。ある日、いつものように面会に行くと、訓練所はいつもと違って騒々しく、スンスから今日戦場に発つのだということを告げられる。突然のことに雷に打たれたように衝撃を受けた珍麗は、そこでも何とか息子を引きとめようとするのであったが、息子は他の訓練兵らとともに軍歌を歌いながら戦地に向かって行くのである。その時になって初めて、珍麗は息子らを乗せたトラックに向かって大きな声で「戦おう、思う存分戦って勝って、勝って、勝つのだ」⁷⁵⁾と叫ぶのである。

この作品における登場人物の設定や境遇は、まさに崔貞熙母子そのものである。⁷⁶⁾ 前述した随筆「私と軍人」では、崔貞熙の息子益祚が朝鮮戦争の時、砲

兵第26大隊第2中隊に入隊しており、崔貞熙がそこによく面会に行っていたという内容が見られ、「空が向かい合う道」と「出動前夜」にそのまま反映され描かれていることが確認できる。⁷⁷⁾ すなわち、この両作品は「私と軍人」を小説化したものであるということがわかる。

また、もう一つの時局的な作品である「林下士とその母」では、林下士こと「イム・ヨンハ」が朝鮮戦争が勃発したとき、母と祖母の勧めで隠れていたのだが、召集命令がきたときには、まだ隠れているという母らには黙って出征し、その後負傷して休暇をもらい久しぶりに故郷の村に戻ってくるまでが描かれている。この作品でも、ヨンハの言葉を通して戦争への積極的な参与が鼓舞される一方、息子に諭されながらも相変わらず息子を戦場に行かせないための策を考え、また息子の帰りを待ち続ける母親と祖母の姿が描かれており、このような面からみると、この作品では息子を戦場に送らなければならない母の苦悩と葛藤がより強く表現されることで、「空が向かい合う道」や「出動前夜」との差違を見出すことができる。

「他者」である日本の主導で展開された太平洋戦争に対して、自分自身の問題として認識しえなかった崔貞熙の「親日」作品には、日本の植民地政策と戦争遂行に追従する内容の作品創作を通して、戦争への積極的な参与を訴える姿勢を見ることができた。その表現方法において、母と息子の姿を軸にした「母情」が中心的に描かれているという点で、朝鮮戦争期の作品との共通点を認めることができる。しかし、「親日」小説に見られる好戦的な母の姿は朝鮮戦争期の作品においては薄れ、その重点が「母の葛藤」の方に移行しているということは明らかである。これは、実際に息子を戦場に送らなければならない母としての苦悩に直面した崔貞熙が、朝鮮戦争をより逼迫した自身の問題として受けとめたことの反映だと考えられる。

このほかに戦争期現実を背景にした作品には、「落ち葉散る日」、「落花」、「墜落した飛行機」がある。「落ち葉散る日」では朝鮮戦争勃発後、姿を隠して

しまい行方の分からなくなってしまった父親を思う娘「クマ」の心情が描かれており、崔貞熙の作品としては珍しい題材である。作品の最後に、大砲の音を聞いたクマが「大砲よ、ドカンと何度も落とせ。38度線がすぐ崩れるように」という言葉があるのだが、この言葉は父親に早く帰ってきてほしい娘の心情から出たものであり、この作品の主たる目的が戦意鼓吹にあるとは言い難い。また、この作品が発表された雑誌『学園』の読者は、その名の通り中高生が中心であることから、そうした事情も配慮して書かれていると考えられる。

「落花」は作品名の下に「コント」という記載があるように、小品に近い作品である。「ソング」の家には杏の木があったが、隣人の「チェミン」がその木に登って花を落とそうとするのがソングには不快だった。そのうちチェミン一家は引っ越してしまったのだが、5年後、前線で戦っている従兄から手紙と写真が届くと、その写真には従兄とともに写っているチェミンの姿がありソングは驚くのである。5年前のチェミンの姿を思い出しながら、杏の実がなる頃には帰ってきますようにと祈るソングの姿には、戦時中の不安や悲しみというよりも「無事に帰ってきますように」と願う崔貞熙の、母の優しさや気遣いを感じられる。この作品が発表されたのは1953年の2月で、戦争も3年目を迎え膠着状態が続くなかで、静かに終戦と平和を願う気持ちが反映されているようにも感じる。

「落花」とは対照的に「墜落した飛行機」では、山に墜落した飛行機とその搭乗員たちの凄惨な姿がたんとと描かれているのが印象的である。集まってきた村人たちの感情描写も、「何か使えるものはないか」と狙っていることだけに限られていて、死体のむごたらしさや、その死体に対する憐みのような感情は感じられない。その死体が「外国人」のものだからなのかもしれない。ただ最後の一文に、墜落死した軍人のポケットから、母かそうでなければ愛する人からの手紙が出てきたというくだりがあるのは唐突で、作品全体の冷たい印象とはずれている感がある。ただ、『正統韓国文学大系 13』に収録された同作

品にこの一文はない。

戦争を題材にはしていないが、女性の苦悩が描かれた作品には「風の中で」と「緑色の門」がある。「風の中で」では母娘の葛藤が中心になっており、夫に裏切られた女性が母としてしか自己の存在の意味を見出せずに娘に執着する姿と、そのような母親からの親離れを企てる娘の姿が描かれている。この母親はいつも不安を感じ、恐怖感に捉われているのであるが、その原因が最初は娘を奪おうとした夫であり、その次には娘の彼氏などの若い男性たちであるように、いつでも男性であるところに特徴がある。戦争と直接関連性のない世界を舞台にしているが、何かにすがるなければ生きていけない母の姿を通して、崔貞熙自身が戦争期に生きながら感じた不安感や孤独を彼女特有の視点で主観的に描き出している。また、戦争のために子供を手放すのとは違った母の葛藤と悲哀とが提示された作品であるといえる。

また、「緑色の門」は女性3名と、男性3名の間で繰り広げられる愛憎模様かストーリーの核を成す長篇小説である。⁷⁸⁾ この作品でまず注目される点は、女性たちの心境の変化である。自分自身の内面で起こる葛藤や迷いの結果起こるものではなく、男性たちの言動に振り回されるかのように変化していく彼女たちの感情は、女性の受動性、従属性をよく表しているものといえる。「女の受難は男によって発生するもの」⁷⁹⁾ という言葉にも、男女間のそのような一方通行的な授受関係が認められるのである。

この作品の終結部分では「戦争というのは本当に罪悪だ。何のためにこの心優しい人々をこのように苦しめるのか？」⁸⁰⁾ という一節がある。このような反戦的な表現が書き込まれたのには、この作品が発表された時期との関連性があると推測される。すなわち「落花」同様、この作品が発表されたのは戦況が膠着状態になりながら、休戦会談が終盤にさしかかっていた1953年初頭であり、休戦に反対する動きとともに厭戦的な雰囲気も社会に蔓延している時期であった。この戦争自体を否定する言葉はまさに、このような社会状況を反映したも

のと考えられるが、戦争期に書かれた女性従軍作家たちの他の作品においては見るできないという意味でも、特筆に価するものである。

IV. 崔貞熙と二つの戦争

崔貞熙にとって、太平洋戦争と朝鮮戦争という二つの大きな戦争体験と、それに基づく認識とはどのようなものであったのだろうか。先に検討した朝鮮戦争期に発表された小説「空が向かい合う道」には同一作品といってよい「出動前夜」には見られない、次のような息子スンスの言葉がある。

第二次大戦のとき、国があって戦う青年を、民族をどれほどうらやましく思ったでしょうか。今やっと、私たちは国を取り戻したじゃないですか。長らく失っていた祖国を取り戻したじゃないですか。この祖国を守るためにお母さん、僕のような人間が戦わずに誰が戦いますか。⁸¹⁾

この言葉には、国や民族を奪われた状況で戦うことの虚しさが感じられる。いくら日本が「内鮮一体」、「大東亜共栄圏」を唱え徴兵制を課したところで、朝鮮の人々にとって欧米との戦争以前に重要な問題として、祖国が奪われている「植民地」の状況があることに変わりはない。太平洋戦争はどこまでも「他者」である日本と欧米や中国などの連合国との戦いであり、戦争に対して第三者的な意識になるのは当然のことである。ましてや太平洋戦争時、朝鮮半島は戦地になることはなかったため、戦争といっても「ニュース映画」で見ればかりで、実感できるものではなかったのである⁸²⁾。このような傍観者のな戦争認識が、結果的に日本の政策にそのまま従う作品創作にもつながっているのではないかと考えられる。

崔貞熙の場合、それは母性を強調する手法として表れているといえる。これまで見てきたように、崔貞熙の「親日」的な作品の多くが、母と息子の姿を通

して描かれていた。息子の幸せを第一に考え、息子に諭されて改心する母親像というのはもちろん、母性を重要視する崔貞熙自身の「母性観」から生まれている。そしてそれに上手く作用したのが、戦時期における「良妻賢母」思想であるといえる。戦時期の国策としての母性強調であったにせよ、母性を強調しての創作活動は、それが「親日」的な内容であればなおさら書きやすい主題であったのではないだろうか。崔貞熙にとって太平洋戦争は間接的な素材であり、あくまで直接的な素材は母性の表出であったからである。

「親日」的な作品で描かれる母親たちの改心は子どもへの愛情から生まれたものとして描かれ、この主体的とは言えない改心は戦争に対する実際の母親の気持ちをうやむやにしている感がある。つまり、母性の強調が逆に、真意を見えにくくしているのである。

一方、朝鮮戦争は朝鮮の人々にとって傍観者的な立場ではいられない逼迫した問題であった。朝鮮全土が戦渦に巻き込まれ、命の危険にさらされた。崔貞熙自身もまた未亡人となって戦火を生き抜いていかなければならないなかで、前述したような従軍作家団員であれば得られた恩恵は非常に大きかったであろう。

太平洋戦争期と同様に作品創作のみならず、空軍従軍文人団の一員として精力的に活動していた崔貞熙は、慰問活動や講演会、朗読会などにも参加している。記者として文学活動を始め、取材で得た情報や講演の内容から記事を起こし、その記事をもとに小説を書くというスタイルを以前からとっていた彼女であるからこそ、生活や保身のためだけではなく、多方面において積極的に活動していたと考えられる。

朝鮮戦争期における時局的な作品においては、母と息子の姿を通して描かれているという、太平洋戦争期作品からの連続性、共通性を確認できた。ただ先にも見たように、題材としての連続性、共通性であるだけで、その内容には差異があることも分かった。朝鮮戦争の勃発によって、息子益祚を戦場に送らな

くてはならなくなったとき、「軍国の母」になりきれない崔貞熙自身の迷いや葛藤が、そのままこれらの作品の母親に投影されていると見ることができる。太平洋戦争期の作品とは逆に、母性の強調がそのまま母の真情を吐露する作用を生みだしているのである。

朝鮮の人々にとって、太平洋戦争が植民地という状況下での、間接的な戦争であったように、朝鮮戦争もまた同族相殺という特殊な性格上の問題を抱えていたことは看過できない。このような点から、この二つの戦争における共通項を挙げるとすれば、それは「絶対的な敵」の不在状態だと言えるのかもしれない。そのことが、この時期の作家らが自身の苦悩を外に発散することのできない制約と限界をもたらしたといえる。

そして崔貞熙においても、戦争期における時局的な作品には共通して母性を中心に、その弱さと苦悩を描くところに留まるといふ、内面志向的な傾向をもつに至ったものと思われる。

V. おわりに

本稿は、太平洋戦争と朝鮮戦争という二つの大きな戦争を経験しながら、活発な創作活動を続けた崔貞熙の戦争期作品に焦点を当て、その戦時体験が作品にどのように反映されているのかについて考察してきた。太平洋戦争期には作品創作以外の文学的な諸活動に積極的に参加する姿勢をみせるとともに、時局に対応する「親日」的な作品を数多く創作していることを確認した。その特徴として、戦争に消極的な母が息子に諭されて改心し、強い母になるというモチーフが多用されているということが挙げられる。これは日本の「軍国の母」称賛に、崔貞熙自身の「母性観」をうまく適応させたものである。また、日本の政策にそのまま従う創作態度には、太平洋戦争を自分自身の逼迫した問題として捉えきれない傍観者的な戦争認識が、その根底にあるものと考えられる。

朝鮮戦争期には従軍作家団に加入し、やはり作品創作以外の活動にも積極的

に取り組みながら、戦争参与を鼓舞する作品も数編書いている。それらの作品はすべてこの母子間の戦争に対する意識のずれを最後には同じくするという、太平洋戦争期のモチーフが同様に用いられており、朝鮮戦争期作品にも受け継がれていることがわかる。

ただ、太平洋戦争と決定的に違うことは、朝鮮戦争が自分と息子の生命を脅かす重大な事件として捉えざるを得ないという、その戦争認識である。それゆえ、朝鮮戦争期の時局的な作品においては「母の葛藤」がより強調されることにより、好戦的な母という印象は弱まっているのである。

以上のことから言えることは、崔貞熙の太平洋戦争期から朝鮮戦争期にかけてみられる時局的な活動や作品創作という一連の対応は、植民地政策への追従や戦争遂行を奨励するという意識から生まれたというよりは、自分に降りかかる出来事や苦難を自分に与えられた運命として受け入れ、逆らわずに生きていくという彼女なりの処世術がもたらした結果であったと考えられる。それゆえ、時局的な内容の作品は二つの戦争期ともに、登場人物や物語の設定などにおいて全て類似しており、これには、母性という型の中に時局という素材を機械的にはめ込んで創作されたような、非常に形式的なものが感じられるのである。時局的な一連の作品が一様に紋切り型で、物語としての広がりや深みを欠いているのはそのためではないかと考えられる。

注

-
- 1) 記者をしていなければ文学ではなく、舞踊や音楽、あるいは女優になっていたかもしれないと述懐している。(崔貞熙「私の文学生活自叙」、『白民』、1948. 3、p.46.)

また、「踊りや歌に嫌気がさしたわけでもなく、私はまたどうして記者の仕事を始め

たのか分らない」とも述べている。（崔貞熙「自叙ひとこま」、『三千里』1941、4月号、p.244.）

なお、本稿では便宜上、すべての朝鮮語文はすべて筆者試訳によって示す。また、日本語の引用文については原文のままとした。

- 2) この投獄は崔貞熙本人の証言によると、階級主義の映画監督である金幽影の妻という点と、左翼系作家の小説を読んでいると言ったことが不利な証言になって投獄されてしまったという。（徐正子「日帝強占期韓国女流小説研究」、淑明女子大学大学院博士學位論文、1987、p.94.）
- 3) 『朝光』1937.4
- 4) 崔貞熙、前掲「私の文学生活自叙」、p.47.
- 5) 「静寂記」『三千里文学』、1938.1、「山祭」『東亜日報』、1938.4.8～19
- 6) 「地脈」『文章』、1939.9、「人脈」『文章』、1940.4、「天脈」『三千里』、1941.1～4
- 7) これは崔貞熙特有のことではなく、張徳祚、李善熙、毛允淑など同時期の女性作家の多くに見られる特徴でもある。
- 8) 筆者はこれまで、朝鮮戦争期の文学について特に従軍作家の作品を中心に若干の考察を試みてきた。（「韓国女性従軍作家研究 —朝鮮戦争期を中心に—」、東国大学大学院国語国文学科碩士學位論文、2003）、「朝鮮戦争期小説研究—韓国従軍作家を中心に—」九州産業大学大学院国際文化研究科博士學位論文、2007）
本稿はこれらにおいて考察した一部の内容のなかで、未見であった作品などを新たに考察対象とし、加筆、修正したものである。
- 9) 「創氏改名」のうち「創氏」は法令による強制で、「改名」は届け出による任意であったが、総督府の強い奨励策により、届出率は約8割に上がった。（田中俊明 編『朝鮮の歴史—先史から現代』、昭和堂、2008、p.276.）
- 10) 正規兵以外の学徒兵や兵的に動員された軍属なども含めると40万人にのぼる人々が動員され、少なくとも2万人が犠牲になった。（同上、p.272.）
- 11) 1938年4月29日に『毎日申報』を改題。この他に、当時朝鮮で発行されていた日本語新聞に『京城日報』がある。（註21 参照）
- 12) 林鍾国『親日文学論』、平和出版社、1966、p.77～179.参照。
- 13) 辛島驍「戦う文人—朝鮮文人報国会の結成」『京城日報』、1943年4月13日。
- 14) 布袋敏博「日帝末期韓国の作家たちが書いた日本語小説の実態」『文学思想』、1996年4月号、pp.48～49.参照。

- 15) 張赫宙の生涯と文学については、白川 豊『植民地期朝鮮の作家と日本』、大学教育出版、1995、白川 豊『朝鮮近代の知日派作家、苦闘の軌跡—廉想渉、張赫宙とその文学—』、勉誠出版、2008 に詳しい。
- 16) 林鍾国、前掲『親日文学論』、p.15.
- 17) 朴春日『増補 近代日本文学における朝鮮像』、未来社、1969、p.362.
- 18) 朴春日、同上、p.353.
- 19) 民族問題研究所 編『親日人名辞典』（全3巻）、민연制作、2009
- 20) 白川 豊「『朝鮮国民文学集』について(解説)」、朝鮮文人協会編『朝鮮国民文学集』、日本植民地文学選集 007〔朝鮮編〕 1、ゆまに書房、2000、p.3.
- 21) 1906年9月1日、朝鮮統監伊藤博文の命名で、『漢城新報』と『大東日報』2誌を買収合併して創刊された。
- 22) 1941年12月27日、府民館大講堂で開かれた朝鮮臨時報国団結成婦人大会で講演した。(林鍾国、前掲『親日文学論』、pp.135~136.)
- 23) 「子をつれて」、p.46.
- 24) 1938年1月に『三千里文学』に発表したものを日本語に翻訳して発表したものである。
- 25) 「黎明」、p.80.
- 26) 同上、p.82.
- 27) 「薔薇の家」、p.148.
- 28) 同上、p.148.
- 29) 林鍾国、前掲『親日文学論』、p.77.
- 30) 崔載瑞「私の頁」『国民文学』1942.3、p.15.
- 31) 「幻の兵士」、p.555.
- 32) 同上、pp.556~557. なお、「諺文」とはハングルを指している。
- 33) 「親愛なる内地の作家へ」、p.175.
- 34) 山田佳子は「記者として出発した作家にとって、素材を記事に、記事を小説にするということは、一つの自然な手順だったのであり、特に新しい境地に足を踏み入れようとしていたこの時期に、そうした方法が有効に作用したのである。」と述べている。(山田佳子「崔貞熙の植民地末期小説研究」『県立新潟女子短期大学研究紀要』第41号、2004年1月、p.210.)
- 35) 崔貞熙は1940年10月12日に「朝鮮文士部隊」の一員として京畿道揚州にある志願兵訓練所を訪問しており、この訪問については「<真実>でもって勝て」という文章

によってその所感を述べている。（「文士部隊と志願兵」『三千里』1940. 12）

- 36) 「野菊抄」、p.139.
- 37) 同上、p.140.
- 38) 林鍾国、前掲『親日文学論』、p.426.
- 39) 「野菊抄」、p.143.
- 40) 崔華星『朝鮮女性読本(女性解放運動史)』、白羽社、1949、p.90.
- 41) 1939年11月に夫金幽影が死亡。夫の間には1932年に生まれた長男益祚がいた。
- 42) 大木基子「良妻賢母主義の教育」、脇田春子、林玲子、永原和子編『日本女性史』、吉川弘文館、1987、p.210.
- 43) 上野千鶴子は、母性は決して「本能」ではなく、また自然それ自体でも、文化でもない」と主張している。母性は何よりも歴史による構築物で、近代家族の「子ども中心性」とともに成立したものだという。（上野千鶴子『上野千鶴子が文学を社会学する』、朝日新聞社、2000、pp.105～106.）
- 44) 岡野幸江「家・家族・恋愛・結婚」、渡辺澄子編『女性文学を学ぶ人のために』、世界思想社、2000、p.23.
- 45) 林鍾国の『親日文学論』を見ると、崔貞熙の名前が出てくるところには必ず金東煥の名前も一緒に確認できる。（林鍾国、前掲『親日文学論』、pp.77～190.参照）
- 46) 崔貞熙「私の人生私の文学」『月刊文学』、1976. 9、p.18.
- 47) 数量的推計は諸説あるが、民間人の犠牲者は行方不明を含めて南北で約200万人、北朝鮮の人民軍は約50万人、中国軍は50万人を超える戦死者を出し、米軍・国連軍の死傷者も40万人に達したという。また、朝鮮半島全土における破壊・損害額は数十億ドルといわれている。（赤木莞爾編『朝鮮戦争』、慶應義塾大学出版会、2003、p.2.、李玉著、金容権訳『朝鮮史』、白水社、1982、p.123. 等参照）
- 48) 現在も南北総人口の3分の1にあたる1000万人の離散家族がいるという。
- 49) 左翼系文学の側は社会性を重視した階級主義の文学を目指し、右翼系文学の側は人間性を重視した民族主義の文学を重要視した。また廉想渉のように、これら左右翼どちらの側にも加担しない中道的立場をとる作家もいた。
- 50) 陸軍約30名、海軍約15名、空軍約16名であった。（韓国文人協会編『解放文学20年』、正音社、1966、pp.89～101.）
- 51) 金在湧『民族文学運動の歴史と理論』、한길사、1990、p.306.
- 52) 李尚源「1950年代韓国戦後小説研究」、釜山大学校博士学位論文、1993.8、p.37.

- 53) これに主導的役割を担当したのが、林和、崔載瑞、李泰俊であった。(林鍾国、前掲『親日文学論』、p.94.)
- 54) 朴英熙『北支旅行記』・『戦線紀行』、林学洙『ペン部隊報告』・『戦線詩集』など。
- 55) 申永徳は、朝鮮戦争期の文人たちの従軍活動が政府の支援下に組織的、集团的に成り立っていたのは、日本の帝国主義体験とともに朝鮮戦争期の北朝鮮文人たちの従軍活動とも密接な関連があるだろうと指摘している。(申永徳『韓国戦争と従軍作家』、国学資料院、2002、p.28.)
- 56) まず 1951 年 3 月 9 日に大邱に避難していた文人たちによって空軍文人団(通称‘蒼空倶楽部’)が結成され、続いて同年 5 月 26 日、同じく大邱にある〈雅淡喫茶店〉で陸軍従軍作家団が結成された。そして、同年 6 月(日にちは不明)、釜山に避難していた文人たちによって海軍従軍作家団が結成された。
- 57) その他、筆者が現在把握している女性作家は孫素熙(陸軍)、^{ソンソヒ}張徳祚(陸軍)、^{チャンドクチョ}尹金淑(陸軍)、^{ユングムスフ}田淑禧(空軍)である。
- 58) 崔貞熙「避難大邱文壇」、韓国文人協会編『解放文学 20 年』、正音社、1966、所収、pp.103~104.
- 59) 朴榮濬「従軍作家時節」、カン・ジノ編『韓国文壇裏面史』、김은샘、1999、所収、p.444.
- 60) 50 年代の作家は悲劇をネタにして何文かのお金を得ていたので一種の乞食であったという。(高銀『1950 年代』、청하、1989、p.272.)
- 61) 1945 年 12 月に結成された左翼系の組織。朝鮮共産党の指示によって、朝鮮文化建設中央協議会(1945 年 8 月 18 日結成。林和が主導)と朝鮮プロレタリア芸術同盟(1945 年 9 月 17 日結成。李箕永らが中心)が統合されたもの。
- 62) 金松は「一部女流中でも崔貞熙、張徳祚、孫素熙ら諸氏が文盟で肩で風を切って歩いていたのは何か女性特有のへつらい根性でもないだろうが、この方たちは後日深く懺悔しているところがあり、それはそれでよかった。」と書いている。(金松「民主化文化の方向」、『自由芸術』1 号、1952.11、p.17.)
- 63) 〈文総〉とは〈全国文化団体総連合会〉の略称で、1946 年 2 月に組織された左翼系の〈朝鮮文化団体総連盟〉に対抗するために、1947 年 2 月に結成された組織である。〈文総救国隊〉は文化人の力量を統一、戦争の勝利に傾注するための緊急措置として結成され、緊急事態に備える宣伝活動などに尽力した。
- 64) 詩人盧天命だけはしばらく拘留されていたが、陳情書を出して放免されたという。(チャン・ソクチュ『20 世紀韓国文学の探検 2 1935~1956』、時空社、2000、p.360.)

- 65) 張徳祚「私が見た共産主義」、(『赤下三朔九人集』、国際報道連盟、1951、p.69.)
- 66) 張徳祚、同上、p.77.
- 67) この期間のうち、14 日分の日記である。
- 68) 「乱中日記から」、p.42.
- 69) 同上、p.69.
- 70) 呉制道「文」(前掲『赤下三朔九人集』)
- 71) 尹金淑「水」『女人たち(尹金淑短篇集)』成功文化社、1976
- 72) 同上、p.120.
- 73) 「あとがき 一言」、『愛の履歴』、p.291.
- 74) 「円形」、同上、p.209.
- 75) 「空が向かい合う道」、p.171、「出動前夜」、p.261.
- 76) 夫、金東煥は朝鮮戦争勃発後、北に拉致され行方不明となった。
- 77) 「私と軍人」、前掲『愛の履歴』、pp.249~250.
- 78) この作品には続編があり、「黒衣の女人」という題目で『女苑』に1955年10月から1956年10月まで発表された。その後、1959年には「続・緑色の門」と改題されて、民衆書館から発刊された。
- 79) 崔貞熙「緑色の門」、p.145.
- 80) 同上、p.105.
- 81) 「空が向かい合う道」、p.157.
- 82) 「帰還勇士と文人座談会」において、崔貞熙は「私達は実際の戦争の体験がありませんでせう?」と言い、それを受けて女性詩人、盧天命は「戦争文学を書きたいと思つても半島人は戦争にゆかないからぴんとかないのです。」と語っている。(「帰還勇士と文人座談会」、p.113.)